

# 人類の知 第七の成熟 「知能の知」から「知性の知」へ

21世紀に起こる「人類の知 七つの成熟」の第七の成熟は、何か。

それは、「知能の知」から「知性の知」への成熟である。

では、「知能」と「知性」、それは何が違うのか。

実は、この二つの能力は、全く違った能力。正反対の能力と言って良い。

「知能」とは、「答えの有る問い」を問う力のこと。「知能検査」という手法に象徴されるように、「目の前に問題が出されたとき、いかに速く、正しい答えに辿り着けるか」という能力のこと。

これに対して、「知性」とは、「答えの無い問い」を問う力のこと。「人生とは何か」「運命とは何か」「愛とは何か」など、深遠な「答えの無い問い」を前に、答えなど無いと分かっている、それでもなお、生涯をかけて答えを求め、問い続ける魂の力のこと。

しかし、20世紀を振り返るならば、人類の知の在り方は、この「知性」よりも「知能」に偏っていた。

世界を「巨大な機械」と見なす「機械論パラダイム」が主流の社会においては、あたかも機械を最適設計するように、問題には必ず「最適解」があり、その解を見出すことが「問題解決」であるとされる発想が支配的であった。そして、その「最適解」を見出す能力として、「知能」が高く評価されてきた。偏差値教育に基づく学歴社会は、その象徴的な姿であろう。

しかし、現実の世界は、むしろ「大いなる生命体」とでも呼ぶべきもの。そこには、「知能」による論理思考だけでは決して処することのできない深遠な問題が、無数にある。

例えば、人生における「意志」と「運命」、「自力」と「他力」、「愛」と「憎」。そうしたものは、本来、矛盾し対立するものであるように見えて、実は、

人生の実相の「表裏」の現れにすぎない。

そして、この実相は、「知能」による論理思考だけでは決して掴むことができない。成熟した知の在り方である「真の知性」によってしか掴むことはできない。すなわち、「深い矛盾を孕んだ問い」答えの無い問いの前に静かに佇み、人生の体験を一つひとつ重ねながら、その問いを問い続ける。その「成熟した知の営み」によってのみ、我々は、人生の実相を、この世界の実相を、掴むことができる。

21世紀に人類全体が直面する問題も、「現世代」と「未来世代」、「先進国」と「途上国」、「経済成長」と「環境保護」など、深い矛盾を孕んだ問題に他ならない。

されば、21世紀において、我々に問われているのは、個々の解決策ではない。我々の「知の成熟」こそが、いま、問われている。

たさか・ひろし◎81年、東京大学大学院修了。工学博士。87年、米国パテル記念研究所客員研究員。90年、日本総合研究所の設立に参画。取締役・創発戦略センター所長等を歴任。00年、多摩大学大学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィアバンクを設立。03年、社会起業家フォーラムを設立。08年、世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilのメンバーに就任。著書に「目に見えない資本主義」「未来を予見する5つの法則」など60冊余。